

令和3年度 公立鳥取環境大学
学校推薦型選抜（Ⅱ型）問題

小 論 文
(経営学部 90分)

(注意事項)

1. 解答開始の指示があるまで問題冊子を開いてはいけません。
2. 問題冊子は4ページ、解答用紙は2枚です。
3. 解答用紙の所定欄に受験番号、氏名を記入しなさい。
4. 解答用紙は横書きです。
5. 試験終了後、問題冊子と下書用紙は持ち帰りなさい。

次の文章を読み、問1～3の問題に答えなさい。

大都市圏で生活をしていると、お金でいつでも何でも手に入るという錯覚に陥る。昼夜を問わず、ファストフードの店で食事し、コンビニで日用品を買い、ジムで汗を流す。子どもに勉強を教えるのも、両親の世話をしてもらうのも、全てのことをお金でまかなうことができる。都市生活者は貨幣経済に極端に依存して生活している。その依存の怖さを実感させたのが東日本大震災であろう。数百円で電車で帰れる距離を、何時間もかけて歩いて家に帰らなければならない、安全な水や食料、トイレトペーパーやガソリンの確保に四苦八苦し、電力制限で猛暑に怯えたのはまだ記憶に新しい。

お金は、そもそも物々交換を効率的に行うための手段として生まれた。魚を持っていて、肉と交換したいとする。そんなに都合よく肉を魚と交換したい人に出会えるとは限らないので、多くの人が欲しがるものにまずは交換しておく習慣が生まれた。みんなが欲しがるものが日本では稲と布だったのだ。稲は「ネ」と呼ばれていて、この肉はどれくらいの「ネ」と交換できるか、という会話から、値段の値（ね）という言葉が生まれた。また、紙幣の弊とは布を意味する。稲は腐り、布は汚れるため、長持ちする金属が用いられるようになり（硬貨）、運びやすいように紙が使われ（紙幣）、現在では時間や空間を超えて使えるクレジットカード、電子マネー、仮想通貨などの新しい形態のお金が生まれている。人と人との取引を便利にするために、お金は進化し、形を変えてきたのだ。

お金が普及・進化する過程と、農村から都市へ人の移動が進む都市化の過程は重なる。限られた人間関係で完結する農村コミュニティでは、複雑なお金の仕組みは必要ない。都市で不特定多数の見知らぬ人との交換の手段としてお金は進化した。都市化の長い過程で、人と人との関係性が徐々に希薄になり、その関係をお金の進化で補い、生活のあらゆるものをお金で交換できるもの、つまり商品・サービスへと変えてきたのだ。住民同士の見守りで保っていたまちの防犯機能が警備サービスに、隣近所や祖父母に頼んでいた子育てが保育サービスに、熱意と志の場であった教育が対価に見合う資格や学歴を得られる教育サービスに姿を変えたのだ。

お金への依存が進むことで、社会道徳が崩壊していくことが各種研究で分かっている。「ハーバード白熱教室」でお馴染みのマイケル・サンデル教授の著書『それをお金で買いますか?』から興味深い事例を2つ紹介する。

ある保育所では、子供のお迎えの時間への遅刻に罰金を導入したところ、遅刻が減るどころか、むしろ増えてしまい、件数が2倍になったというのだ。時間を守る、保育園・保育士に迷惑をかけないという道徳的義務とみなされていたものが、罰金、すなわちお金で保育時間を購入する貨幣経済の論理に変わってしまったのだ。

放射性核廃棄物の処理施設の建設候補地となっていたスイスの山間部の村・ヴォルフェ

ンシーセン。その是非を問う住民投票の直前に、村民に対して「処理場の受け入れに賛成するか、反対するか」を尋ねる調査を行ったところ、賛成 51%、反対 49%とかろうじて賛成が上回っていた。続いて、その調査に建設時には毎年補償金を住民に支払うという「アメ」を加えたところ、ア) **賛成の割合は 25%に半減した**という。国全体の公益を考えた道徳心で受け入れようと思っていた人の心に、貨幣経済の論理が加わった結果、消費者としての損得の判断になり、道徳心が締め出されてしまったのだ。

社会全体が利便性や効率性をどんどん追求していく過程で、損得とは異なる価値軸にあった公共心、道徳心が貨幣経済の波に飲み込まれつつある。

～ 中略 ～

地域で過ごしていると、お金で買えないものがあることを実感する。インターネットでたいていのものを購入できるが、深夜営業のような便利な都市型サービスは限られる。旬の概念が強く残っているため、それを逃すと食べたいものが食べられない経験もする。

一方、お金以外で生活必需品を手に入れる手段が豊富なのも地方圏での暮らしの特徴だ。旬の野菜や魚介類、時には山で採れた鹿や猪など、地域ならではの、季節ならではの食材をおすそ分けでいただける（贈与経済）。通りがかりの見知らぬ農家の方が事務所に大量の野菜を置いて行った時は驚いた。

地域の共有財産である海でハゼやアナゴを釣り、川でペットボトルを加工した仕掛けでエビを捕まえ、庭の畑でナスを育てれば、豪勢な天ぷらが食べられる（自給経済&共有経済）。天ぷらだけならお金で買えるが、家族や仲間での釣り・収穫から調理までの一連の体験はお金で簡単には買えない。

貨幣経済においては、商品とお金を同じタイミングで等価交換するのが基本だが、地域ではそうではない取引が頻繁に起こる。その典型が、おすそわけに代表される贈与経済である。AさんからBさんへ旬の野菜が渡される。その時はBさんからAさんへは感謝の言葉しか返されない。その後、Bさんは得意の煮物でAさんに返礼をする。庭の草むしりをしていた隣のBさんを見かけて、Aさんがお手伝いをする（労働というサービスの提供）。Bさんは親戚が作っているお米でお礼する。旬の野菜と煮物、草むしりとお米は価値もタイミングも異なる。価値は人や時によって異なり、必ずしも等価にはならない。この等価交換ではない経済が地域で成立するには、2つのポイントがある。

①ギブから始める

1つ目は、まずどちらかが等価交換を前提としない「ギブ」行為、旬の野菜や草むしりの労働といった無償の奉仕をするところから始まることだ。これがどちらからもないと始まらない。

②交換を不等価にする

もう1つは交換を不等価にすること、つまり常に「借り」がある状態が続くということである。BさんはAさんに草むしりをしてもらい「有難い」と思う。そこで、Aさんにお米を贈る。さらに、Aさんは「草むしりくらいでお米をもらって悪いな」と思い、「他に何か手伝えることはないかな」と考える。

～ 中略 ～

ギブから始める、交換を不等価にするという話は、東京・西国分寺でクルミドコーヒーを運営する影山知明さんに教えてもらったことだ。

人はたいてい「稼ぎたい」「自分がやりたいことを実現したい」そんなテイク (take) の思いと「美味しいものを食べてもらいたい」「世の中の役に立ちたい」などのギブ (give) の思いの2つを持っている。これは二者択一ではなく、両方ある。ただし、その順番が大切だと影山さんは指摘している。まず、地域に、周りの人にギブしたい、そんな思いが先立つことで、地域にはギブの循環が始まる。

また、著書『ゆっくり、いそげ』に書かれていた「不等価交換にする」ことの重要性についてのエピソードには衝撃を受けた。クルミドコーヒーで開催しているクラシックコンサートの話なのだが、開催当初は一定の目安(1500円)を提示した上で、参加費をお客さんに委ねる投げ銭システムをとっていたそうだ。すると、ほとんどの人は1500円以上を払ってくれた。成功したと思ったが、イ) 思うようにお客さんが増えず手ごたえを感じられなかったそうだ。ある時、影山さんは「ああ、毎回毎回『精算』されてしまっているのだ」と気づいたという。コンサートに見合う金額(等価)を払い、満足して帰る。それでは次にはつながらない。払った以上の価値あるコンサートを楽しめたと思うと、人の心の中に「借り」の感情が生まれ、「お得だったなー」「SNSで発信しよう」「今度は誰かを連れて行きたい」という気持ちが掻き立てられる。

仕事、地域活動、日常生活の中で、互いに自分のできること(価値)をギブする、それに対して頂いた価値以上のものを返礼する。この不等価交換の繰り返しが、人と人との支え合う関係を作りあげる。これが可能なのは、貨幣経済だけに依存しない贈与・自給・共有経済が残る地域の特徴である。

寛裕介(2019)「持続可能な地域のつくり方」英治出版(P384・L1～P390・L6)

問1

下線部ア) について、賛成の割合が半減したのは、貨幣経済の論理が加わったことで、どのような損得の判断が生じたためだと考えられますか。40 字以上 80 字以下で説明しなさい。

問2

下線部イ) について、お客さんが増えなかった理由を筆者はどのように考えていますか。80 字以上 120 字以下で説明しなさい。

問3

あなたは、高齢者の方が一人で暮らす場合、都市と地域ではどちらが生活しやすいと考えますか。その理由を、筆者の考えに即しそれぞれの特徴を踏まえて 500 字以上 700 字以下で述べなさい。